

「民俗の地域差と地域性」研究の課題と研究経過

小島 美子

本書は昭和六十年（一九八五）度から六年間にわたって行われた国立歴史民俗博物館の特別研究（後に特定研究に変更）「日本歴史における地域性の総合的研究」（研究代表者 土田直鎮）の課題C「民俗の地域差と地域性」⁽¹⁾の研究成果報告書の第一冊めに当たる。第二冊めは来年度に刊行の予定である。

この課題C「民俗の地域差と地域性」の最初の研究代表者は、故坪井洋文であった。昭和六十二年度からは坪井の要請によって小島が引継ぐことになったが、この共同研究には、坪井が生涯をかけて行ってきた民俗学研究の方向、そしてそれこそが現在の日本民俗学にとってきわめて重要な課題を背負った方向を進展させたいという願いがこめられていたように思われる。その願いを充分に実現できなかったことについては、私は責任を負わねばならないと思うが、この第一冊めの研究成果報告書の刊行に当たって、本研究の研究課題や計画については、坪井自身が「中間報告I」⁽²⁾で述べていることばを、できる限りそのまま伝えるべきであろうと考える。

一 研究の課題と計画

この特別研究全体について坪井は、「本館が独自に当面する重要課題を選び、国民の負託を受けて実施する研究である」とまず述べている。これは形式的な「公式見解」として述べられたものではないと、私は受けとめている。その先につづく坪井の文はそのまま引用しよう。

「当初の研究計画書には、研究目的として次のように明記している。

南北に長い日本列島の自然的・地理的環境の多様性は、当然そこに住む人々の歴史にもきわめて多様な展開をもたらした。日本歴史の総合的・体系的把握のためには、こうした日本の社会や文化の地域的多様性を踏まえた歴史認識が不可欠である。日本歴史を単一民族の歴史ないし一つの政治的・文化的統一体の歴史としてとらえる前に、それぞれの歴史的個性をもついくつかの地域とその相関関係を重視することによって日本歴史をとらえなおすことが要請されるのである。

歴史的把握の単位としての地域は、時代や事象によってもそれぞれ異

なるが、本研究では文献史学・考古学・民俗学のそれぞれの方法によって、いくつかの具体的地域についてその地域的特性の実態を具体的に追求し、さらにその成果をふまえて日本歴史における地域性の問題を総合的に検討しようとするものである。

このように、本研究は本館設立の理念に立脚して、その実を挙ぐるべく計画されたものであった。そこでは、明確に従来の日本史研究における単一史観を再検討すること。そのための視点として地域を単位として全体史を把握していく方法を共通に認識すること。したがって、方法としては地域単位の実証的研究を実施することになるが、それは考古学・文献史学・民俗学の協業による独自の総合的分析を主張したものであった。」

一九七〇年代から八〇年代にかけては、日本民族文化の源流や形成の問題が、広く日本の人文諸科学にわたって論じられた。国立民族学博物館が一九七八年から十年計画で行った「日本民族文化の源流の比較研究」は、学際的にその成果を集約したものである。また九つの人文諸科学の連合組織である九学会連合では、一九八〇年から八二年にかけて「日本の風土」についての総合的な共同研究を行った。こうした動きと深く関わって、歴史学の分野では、日本の歴史を、稲作農民を中心とした単一史観で捉えてきた従来の研究に対する批判や反省が高まってきた。

これに対して、それまで柳田国男の、日本人と日本文化を基本的に稲作民族と稲作文化とみなす考え方に深く影響されてきた日本民俗学の分

野では、満を持していた坪井洋文が『イモと日本人』⁽³⁾で批判の声をあげたのをきっかけにして、ようやく単一文論の検討が、大きな波になり始めた。本館の第四展示室の展示も、その大きな成果の一つといえることができる。

その一方で坪井は、日本の民俗文化における多様な文化の存在を学問的に確認するためのプロジェクトを展開させていた。その最初の作業が、本館の民俗研究部を中心に一九八一年から八五年にかけて行われた共同研究「畑作農村の民俗誌的研究」であった。その研究成果報告書の最初⁽⁴⁾に坪井は次のように述べている。

「地域なり集団の担う民俗の全体を捉えて体系化したものが民俗誌にほかならないが、本研究は日本民俗文化Ⅱ社会を畑作農耕を軸とした視点から調査・分析したものである。従来の民俗誌はもっぱら水田稲作農耕村落を調査対象としてきたために、非稲作村落である畑作村落の民俗を体系的に捉える方法論や概念を持ち合わせていなかったといつてよい。そうした反省ののちとして、畑作農耕を軸とした村落を対象として、その生活様式の独自性を抽出しようとしたのが本研究の目的である。」

こうした研究の流れと展開を考えると、この「民俗の地域差と地域性」の共同研究で坪井が第一に意図したのは、日本の民俗文化を稲作文化や畑作文化にとどまらず、それぞれの地域に根ざした多様な性格をもつものとして、実態に即して捉えようとしたのではないかと思われる。そしてそれは日本民俗学が当面していたもつとも重要な課題であり、本館の民俗研究部門が担うべき課題だったのでないだろうか。そしてそれ

はまた歴史学や考古学における東国と西国の問題などに呼応する動きでもあった。

ただ、今考えてみると、坪井のこの考え方は必ずしも共同研究に参加したメンバー全員に共有されていたわけではなかったし、むしろ坪井はさまざまな考え方で参加した共同研究者たちが、それぞれの考え方で報告してくる調査結果から地域差を見出し、さまざまな軸で地域性が抽出されてくるのを期待したのではないかと思われる。坪井はこのC班の「民俗の地域差と地域性」の研究計画について次のように述べている。

「C班の研究計画は、第一に、日本人の民俗的世界を構成する基本的要素を取り挙げ、基本的要素の諸事象に関する全国的次元での地域差を設定し、第二に、得られた地域差に基づいて地域差の意味を解析して地域性を抽出することを目的として立てた。その場合、視点として地域性を生成する政治的統合の作用や近代化過程における社会変動との関係を重視することにあるが、分析対象としての基本的要素の枠組を第I期から第III期まで次のように設定したのである。

第I期（昭和60～61年度）

課題 生活技術の地域差と地域性

内容 日本人の生活技術はきわめて多様で、また地域性をもっているが、今日まだ十分にその検討はおこなわれていない。ことに現代文化の中における位置づけ、生活技術の構造的把握は不十分である。したがって、本研究においては、生活のもつとも基本的な食生活を中心に、その資料の調達から調整、食事のための個々の道具とその

組合せ、道具の素材、形態、用法、さらに流通と製作技術の系譜と伝播を明らかにし、その使用される場としてのイエの問題を構造的に考察することによって、生活技術の地域性を明らかにする。主要なテーマは次のようである。

- (1) 食糧の調達と調整
- (2) 鍋、釜を中心とする飲食具の用具論
- (3) 生活の場としてのイエの生活空間の総合的把握

第II期（昭和62～63年度）

課題 社会組織の地域差と地域性

内容 日本民俗社会の社会組織は、形態的にも、また構造的にも極めて多様性に富んでおり、これを幾つかの地域的構造的類型として理解することが可能である。しかしながら、これまでの社会組織の民俗学的研究においては、個別的な社会組織の地域差を明らかにすることにとどまる傾向が強かった。そこで本研究においては個々の社会組織の地域性をまず明らかにするとともに、これらを含む全体をひとつの体系としてとらえ、類型論的に社会組織の地域性を明らかにしたいと思う。本研究でとりあげる主要な社会組織は以下の4つである。

- (1) 家族組織と婚姻形態
- (2) 若者組を中心とする年齢集団組織
- (3) 神社の祭祀組織
- (4) 村落空間のデザイン

第三期(昭和64～65年度)

課題 民俗信仰の地域差と地域性

内容 次の4つのテーマを設定する。

- (1) カミ観念 日本人の自然観と世界観を生みだした根本的な観念である。
- (2) 祖霊崇拜 日本人の霊魂観と祖先観を与える独自の信仰形態である。
- (3) 神・仏信仰 日本人における祈願と供養の心意を方向づける重要な指標であった。
- (4) タタリ・ツキモノ・サワリ わが民俗社会における基層的な心意をあらわす代表的な信仰現象である。

上にあげた4つの特質は共時的にも通時的にも日本人の民俗信仰を大きく方向づけてきた重要な信念体系であったといえるが、しかし同時にそれらの要素は、農村・山村・漁村などの地域において、それぞれ固有の特質を示してきたことも否定することができない。基本的な信念体系と地域的な個性を示す信仰現象との相関関係の問題がそこから浮かび上がってくるのであるが、その場面における相互の構造的な意味の究明を通して民俗信仰における『地域差』と『地域性』の課題に光を当てることを目的とする。また一方、わが国においては古来、南島の沖縄や北方のアイヌにおいてそれぞれ固有の民俗信仰が形成され発展してきたが、それらの信仰の特質を明らかにすることを通して、従来の民俗学においていわれてきた『固有信

仰』の理論と内容について再検討をおこない、広く民俗学で問題にされる『地域性』の課題を説明しようと思う。」

以上の説明でわかるように、「民俗的世界を構成する基本的要素」の枠組については具体的に説明されている。しかし地域性を設定する軸については、第三期の部分で「農村、山村、漁村などの地域」を例にあげ、またそれとは違った次元で南島やアイヌをあげているだけで具体的にはあげていない。それが後にはいろいろな問題点を生む結果になった面もあったのだが、やはりそれ自体もこの共同研究の成果から導き出そうとしたのであろう。

ただ、この説明の中ではさりげなく述べている「視点として地域性を生成する政治的統合の作用や近代化過程における社会変動との関係を重視する」ということばに、坪井の考えていた第二の重要な問題点があったように思われる。この「中間報告I」の文章は、そのあと後述のように研究組織と第一期の研究経過の項につづくのだが、そのさらにあとに次のような文を述べてこの文全体をしめくくっている。

「すでに明らかかなように、民俗現象を対象として地域差および地域性研究を進めていくためには、日本民俗学の目的、概念、方法論によっては十分な成果を期待することはむずかしい。日本民俗学は民俗現象を単一的起源になる一元的発展の構図を前提としてきたためであるが、一方では、地域の個性から出発して、その全体像と普遍性を捉える視点のあったことを忘れてはならない。こうした幾つかの流れを越えた立場で、本研究が民俗研究に対してどのような視界をひらいていくのか、また関

連領域との回路を発見するのか、これからの研究に期待の寄せられるところであろう。

また、近代以降の工業化への経済構造の転換、生活文化次元での都市化への転回は、とくに一九六〇年代以降の経済の高度成長と相俟って、一国文化の画一化が進行の極に到達しようとしている。こうした基層の上部を覆った現象は決してコンクリートなものではなく、そこにも地域差や地域性を認めることは可能な筈である。われわれは単に、本研究が過去の時間上の問題に限定されるのではなく、より豊かな現代と未来へむけての歴史や文化の可能性を探ろうとするものであることも、共通の関心点であることを確認しておく必要がある。」

坪井は稲作農耕を生産基盤にした天皇家による政治的支配が、日本の民俗文化の地域性に対して与えた深い影響にも、鋭い眼差しを注いでいたし、現代社会の急激な変化も含めて、歴史的な変化をきわめて動的に捉えたいと願っていたように思われるし、今後の歴史と文化の可能性も探ろうとしていた。そしてこうした研究を行うために、従来の民俗学の方法を越えた新しい方法の展開が必要であることも予期していたように思われる。歴史学との協力態勢については、とくにひじょうな関心をもっていたのも、そのためであったろう。最初の研究代表者坪井洋文が、その生涯の最後の時期にリードしたこの共同研究に寄せた期待は、このように大きいものであった。そしてこれは日本民俗学の当面の課題として、きわめて重要なものであり、本館の民俗研究部門が担うべき課題でもあった。

一一 研究組織と研究経過

以上のような研究課題に基づき、まず最初に次の十六名によって共同研究の組織が構成された。

坪井 洋文	国立歴史民俗博物館民俗研究部教授（研究代表者）
塚本 学	国立歴史民俗博物館歴史研究部教授
小島 美子	国立歴史民俗博物館民俗研究部教授
岩井 宏實	国立歴史民俗博物館民俗研究部教授
山折 哲雄	国立歴史民俗博物館民俗研究部教授
福田アジオ	国立歴史民俗博物館民俗研究部教授
山本 光正	国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授
上野 和男	国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授
八重樫純樹	国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授
松崎 憲三	国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授
高桑 守	国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授
倉石 忠彦	国学院大学文学部助教授（本館客員教官）
湯川 洋司	山口大学教養部講師
佐々木長生	福島県立博物館学芸員
香月洋一郎	神奈川大学日本常民文化研究所助教授
山本 質素	東海大学文学部講師

さらに昭和六十一年からは

篠原 徹 国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授
 が加わり、さらに翌年

岩本 通弥 国立歴史民俗博物館民俗研究部助手
 が加わり、さらにその翌年

橋本 裕之 国立歴史民俗博物館民俗研究部助手

が加わった。しかし逆に高桑守、松崎憲三、山折哲雄が転出して参加できなくなり、さらに塚本学、山本光正、八重樫純樹が途中から参加しなくなり、一九八八年六月には坪井洋文が不帰の客となって、最終的には本書に執筆している十一名とアフリカに調査のため長期滞在中の篠原徹のみの淋しい陣容になった。これはこの共同研究が、結局は歴史学や情報科学のメンバーと十分な協力態勢をとることができなかったことを意味しており、その多くの責任は私にある。少なくとも坪井洋文が研究代表者であった第Ⅰ期には、途中で転出した高桑守以外は、すべてこの研究に参加していた。

さてその第Ⅰ期の研究経過については、坪井自身のことばをそのまま借りよう。

「まず、計画の実施に当っては、基礎デスクワークとして基礎的文献の集成をおこなった。これは地域差および地域性に関する従来の研究のうち、重要と判断される基礎的文献をリストアップし、雑誌論文についてはコピー化するもので、これをもとにして本研究の学史的位置づけをおこなうとともに、定例の研究会を開いて問題を抽出することになった。すでに昭和六十年三月に『民俗の地域差と地域性文献目録(稿)』として

出版している。この作業と並行して、電算機に民俗資料を入力し地域差を把握するための方法的なおこなってきた。新しい試みであるために、早急な成果は望み得ないとしても、全体の研究の進捗とともに開拓の方向を探っていきたい。

次にフィールド・ワークとして新しく設定した地点がある。いうまでもなく日本民俗学における民俗誌的成果の蓄積は膨大であるが、その上立って本館民俗研究部の『民俗フォーラム』同人の手によって昭和六十年度より民俗誌の文献目録をはじめとする関係文献目録を作成中である。そうした作業を土台としながら、本研究の目的に沿った新しい調査地を必要とするのである。当初は地域性にかかわる文献史料をも探索し得る地点として三十余を計画したのであるが、予算上の制約によって七地点に絞らざるを得なくなった。これらの地点はいわば長期的に民俗資料を蓄積し観察していくための定点調査の対象となるものである。そこで観察し、記録し、分析したものを通して相互に情報を交換しながら比較可能な基本要素や問題点を研究会において討議するのである。」

このように坪井は述べ、さらにつづけてこの『中間報告Ⅰ』について、「実は本書はその過程で得られた成果の一部を印刷したものであり、第Ⅰ期におけるフィールド・ワークの抄録としての意味を持つのである」と述べている。

この『民俗の地域差と地域性——中間報告Ⅰ——』は次のような内容になっている。

まえがき

坪井 洋文

総論

「民俗の地域差と地域性」研究の計画と課題 坪井 洋文
 民俗誌にとって「地域」とは何か 山折 哲雄

調査中間報告

三坂峠周辺の集落景観——尾根歩きから—— 香月洋一郎

孤屋の村落生活と儀礼 湯川 洋司

荒蒔の社会組織と儀礼 岩井宏實・上野和男

大平の村落と村落景観

1 村落空間と村境 福田アジオ

2 大平村下絵図から 塚本 学

久留里大谷の民俗と歴史

1 大谷の民俗誌的素描 松崎 憲三

2 歴史資料より見た大谷村 山本 光正

幕内——『会津農書』の村の民俗調査 佐々木長正

津軽半島東岸漁村の生活と民俗

——青森県東津軽郡平館村概況報告—— 山本 質素

研究会記録

この研究会記録は後述のような研究会の記録と発表者各人の一頁または二頁の研究発表要旨が載せられている。

すでにこの第Ⅰ期で、ある程度の調査や研究の成果があがっていたことが、これによって明らかであろう。

しかし問題点もなくはなかった。定点調査地を三十六か所から大幅に

減らさざるを得なかったとき、民俗の地域差や地域性を抽出するのにまことにふさわしい地点が選ばれたとはいえないのである。それは基本的には地域性についての共同研究者の考え方が、まったく統一されていなかったためである。それについては、すでにこの『中間報告Ⅰ』の中でも、指摘されていた。松崎憲三は次のように述べている。⁽⁵⁾

『民俗の地域差と地域性』解明の基礎作業として、数ヶ所のフィールドを選び定点観測を行なうことになったが、必ずしも明確な基準があったフィールドが選定された訳ではないし、定点観測をベースにどのような手続きで『民俗の地域差と地域性』が明らかになるのか充分討議され、共同研究員合意のもので調査が進められている訳ではない。当初の予定では二年単位で生活技術伝承、社会伝承、信仰伝承の地域性を追求していくとの案も出されたが、併行して実施している共同研究「畑作農村の民俗誌的研究」との連動から、じっくりフィールドを設定し長期的に民俗の実態とその変化を把握することの必要性が強調された結果、課題よりもフィールドワークが優先されてしまったためである。

とはいえ、地域性解明を目的としている以上、一応の調査基準を設定した上でフィールドへ、ということ、生活技術伝承、社会伝承、信仰伝承各々について調査基準を検討してみたが、地域性の概念について統一を見ない上に各々関心が異なり合意を得るに致らなかつた。結局、各人の課題に沿ってフィールドを設定し、具体的な作業を進めつつ検討しようということになったのである。」

また山本光正も『民俗の地域差と地域性』に対し、歴史学の立場から

どの程度参加できるかと期待したが、本研究参加者の意志統一がなされていたとは言いがたいため、歴史の立場からいかに参加するのかが方向を見出すことはできなかった」と述べている。

こうして大きな問題を抱えたまま、定点調査地としては次の七か所が決まった。

福島県会津若松市幕内

静岡県沼津市大平

奈良県天理市荒蒔

千葉県君津市久留里

青森県東津軽郡平舘村

愛媛県喜多郡内子町

熊本県荒尾市野原

これらのうち、前の四か所は、歴史的な古文書資料がある地点として選ばれ、後の三か所は生活様式が大きく異なる地点として選ばれた。ただし前述のように途中でさまざまな事情で参加しないことになった人々もあり、結局千葉県君津市久留里は『中間報告Ⅰ』以後とり下げられた。また愛媛県喜多郡内子町は高知県長岡郡大豊町岩原に変更になり、新しく新潟県佐渡郡相川町が加わった。

これらの地点については、集中的な調査が行われ、本書ではそのモノグラフが報告されている。

こうした第Ⅰ期の研究経過については、坪井自身ももちろん問題点を意識しており、『中間報告Ⅰ』のまえがきを次のようなことばで閉じて

いる。

「Ⅰ期においては生活技術を中心とした地域差を抽出し、地域性を論じる予定であったが、各研究者の固有な調査方法と問題意識に委ねたため必ずしも統一のとれたものにならなかった。Ⅱ期以降については如何なる調査基準を設け、何を地域差として抽出するのが妥当か検討する予定であるが、その土台となる基礎的な作業として中間報告を位置づけた。ありうべき民俗誌の並列がそれ自身で地域差を語り、地域性について論じることができるようを目指して今後考えていきたい。」

こうした反省に基づき、第Ⅱ期の研究会では、まず第一に民俗の地域差と地域性の概念について、報告と討議が重ねられた。しかし全国的なレベルでの地域差や地域性の枠組を考えたり、作業仮説として地域性を設定したりするには、現在の時点でのデータは少な過ぎ、集中的な調査のつみ重ねがさらに必要で、その中から地域差が自ら明らかになるだろうという議論も少なくなかった。結局、地域性についての討議は深められたものの、各研究者の地域性論にはかなりの相異があることが、かえって明らかになったことも認めざるを得ない。

第二に、生活技術、社会組織、民俗信仰の各項目について、第一期に提起されたものを検討し、基本調査項目を設定した。これについて各定点調査地で調査を行った結果が、この調査報告書で報告されているので、その基本調査項目については、各報告を参照していただきたい。

これらの研究会と並行して、もちろん定点調査地の実地調査が行われ、また文献調査も行われたので、第Ⅱ期を終るに当たって、『中間報告Ⅱ』⁽⁶⁾

を刊行した。その内容は次の通りである。

まえがき

民俗の地域差と地域性文献目録（稿） 追補

A 地域性（一般論） 目録補遺

B 定点調査地別文献目録

⑦ 青森県東津軽郡平館村

① 福島県会津若松市幕内

⑦ 新潟県佐渡郡相川町

⑤ 静岡県沼津市大平

④ 愛媛県喜多郡内子町

⑦ 熊本県荒尾市野原

研究会記録

会津若松市幕内の文書

『会津幕之内誌』（佐瀬寿江氏蔵）

『佐瀬家記録一』（佐瀬哲義氏蔵）

『佐瀬家記録四』（ ）

『佐瀬家記録十』（ ）

解題 （佐々木長生）

第三期に入って、研究会では地域差と地域性について討議をつづけるとともに、定点調査地の調査報告を受け、また別記のように米山俊直、朝岡康二の各氏に特別講演をお願いした。また平成二年二月には『日本歴史における地域性の総合的研究』の合同報告会を、A班B班とともに

行い、各班の研究概要を報告し、交流しあった。平成三年一月に行った最後の研究会で、全調査地の実地調査について簡単な報告を行うとともに、報告書について打ち合わせを行い、最終的に二冊刊行することを決めた。その第一冊めが本書で、内容はそれぞれの定点調査地に関する調査報告である。二冊めは①定点調査の成果をもとにした、民俗の地域差と地域性に関する論文、②民俗の地域差と地域性に関して、原理的な議論を展開する論文、③民俗の地域差と地域性に関する各論、以上三つのうちのいずれか一つを研究者が選んで執筆する予定になっている。本研究の真価が問われるのは、来年度に刊行されるこの第二冊めになるであろう。

おわりに

この共同研究のもつ問題点も、かなりはつきりと述べてきたが、しかし考えてみれば、本研究は日本民俗学が地域性の問題に正面からとり組んだ最初の大きな研究プロジェクトといってよいだろう。柳田国男はもちろん地域差があることは認めていても、むしろそれを歴史的な発展段階の差と捉えていた傾きが強いし、稲作文化一元論に集約していくための個々の現象として捉えていたのではないだろうか。日本の民俗文化に多様な姿があり、それが地域性という形で捉えられるという認識は、日本民俗学では坪井洋文以来という、いい過ぎだろうか。坪井洋文が『イモと日本人』を発表した時の坪井自身と民俗学界の緊張した空気を

思えば、それはいい過ぎではないと私は考えているのだが。

その意味で本研究が日本民俗学に果す役割は小さくない。

ただおそらく坪井がもっていたに違いない日本の民俗の地域性についての構想を引き出しておかなかったのは、きわめて残念であった。すでにふれたように、稲作文化に対する畑作文化や漁労文化、南島の文化などについては、本館第四展示室にきわめてわかり易い形でその構想は示されている。また東国と西国についても考えているところがあつたはずである。私は個人的に東国には西国のような本格的な稲作儀礼が発達していないということばを、坪井の口から聞いていたが、これについてもこの共同研究は成果をあげることができたかも知れないのである。

坪井がこの共同研究の最初に、自分の構想を示し、その考え方で統一していれば、それなりの成果があつたかも知れないと思う。しかしそういうやり方をとらず、参加者たちが実地調査の中から地域性についてのさまざまな枠組を見出してくることを、むしろ期待したのではないだろうか。そして第Ⅱ期第Ⅲ期に、この態勢をたて直すことは不可能で、この共同研究は第Ⅰ期の態勢のまま走りつづけたのであつた。

ところでこの報告の初校の段階で起きてはならないことが起こってしまった。この共同研究のメンバーである香月洋一郎氏は、締切り期限内に「ムラの成立伝承とその構造を中心に——高知県長岡郡大豊町岩原——」という論文を提出され、早々と図版なども含めてすべて初校も済まされて歴博に戻された。ところがその後歴博と印刷所とのやりとりの中で多数の図版・写真などがすべて行方不明になった。歴博側も印刷所

側にも協力を求め、八方手をつくして探しているが、現在の段階でまだ見つかっていない。この香月氏の論文は大がかりな航空写真や詳細な図版などを中心的な資料として書かれており、これらの図版・写真などがなければ成立しない。香月氏は当初それらの大変な図版や写真を再度作成する労も惜しまぬ気持でおられたが、歴博側の対応があまりにも遅れたため、その意向も踏みにじる結果になってしまった。そのため、この報告書に香月氏の論文を掲載することを断念せざるを得なくなった。

この点について香月氏、香月氏の調査に協力された大豊町の方々、またこの共同研究に加わられた方々、さらに当然本書でこの論文を読まれるはずであつた多くの方々に深くお詫び申し上げる。なお今後とも発見につとめ、見つかった場合には、次の報告書に発表できるよう香月氏にお願いしたいと考えている。

最後にこの共同研究で行われた研究会の記録をかかげる。

昭和六十年

第一回研究会（九月二十七日）

東日本・西日本論の系譜前史

福田アジオ

日本史における地域区分について

塚本 学

第二回研究会（十二月七日）

生活技術の調査基準

岩井 宏實

民俗信仰の調査基準

山折 哲雄

第三回研究会（二月三日）

社会組織の調査基準

上野 和男

調査基準に関する全体討議

三班合同研究会（二月二十六日）

民俗学における地域差と地域性研究現状

松崎 憲三

昭和六十一年度

第二期以降の研究に関する質疑と討論

第一回研究会（六月三日）

会津若松幕内調査中間報告

佐々木長生

荒尾市野原調査中間報告

湯川 洋司

天理市荒蒔調査中間報告

岩井 宏實

上野 和男

第二回研究会（七月二十九日）

日本民謡における地域性

小島 美子

沼津市大平調査中間報告

福田アジオ

第三回研究会（十一月四日）

民俗の地域差と地域性

香月洋一郎

沼津市大平調査中間報告

篠原 徹

第四回研究会（一月二十八日）

津軽郡蟹田町周辺調査中間報告

山本 質素

奈川村神谷の生活

倉石 忠彦

三班合同研究会（十二月八日）

民具から見た東と西

岩井 宏實

昭和六十二年度

第一回研究会（五月二十九日）

第一期中間報告の反省と今後の課題

坪井 洋文

地域性定点調査の意義

上野 和男

第二回研究会（七月十七日）

日本民俗における地域概念

山本 質素

定点調査の再編成に関する討議

基本調査項目の設定

生活技術

社会組織

民俗信仰

民俗信仰

民俗信仰

第三回研究会（二月五日）

民俗と地域性—もう一つの地域性論—

岩本 通弥

昭和六十三年度

第一回研究会（五月二十一日）

民俗の地域差について

湯川 洋司

民具からみた会津の地域性

佐々木長生

第二回研究会（九月三十日）

道具の素材と植生

篠原 徹

かくれキリシタンとかくれ念仏

山折 哲雄

かくれキリシタンとかくれ念仏

山折 哲雄

第三回研究会 (三月一日)

伝承母体と伝承地域

民俗文化の地域差をつくるものところわすもの

平成元年度

第一回研究会 (六月二十四日)

民俗芸能の地域差と地域性

―若狭における王の舞の分布と特色を

手がかりとして―

地域認識と地域差

今後の研究会の進め方についての協議

第二回研究会 (十二月二日)

地域性について

―これまでのフィールド・ワークから―

〔特別講演〕

日本文化の地域的単位について

―小盆地宇宙モデル―

平成二年度

第一回研究会 (七月十六日)

幕内民俗抄

幕内の生業から見た地域性

〔特別講演〕

職人文化と地域性

福田アジオ

小島 美子

橋本 裕之

倉石 忠彦

香月洋一郎

米山 俊直

倉石 忠彦

佐々木長生

朝岡 康二

第二回研究会 (一月七日)

① 総括報告 (研究代表者) および調査の状況についての報告 (全員)

② 討議

③ 研究打ち合わせ

註

- (1) 課題Aは「中・近世における東国と西国」、課題Bは「古代東国の地域的特性」
- (2) 『民俗の地域差と地域性―中間報告―』一九八七年三月 国立歴史民俗博物館 特別研究『日本歴史における地域性の総合的研究』「民俗の地域差と地域性」研究班
- (3) 坪井洋文『イモと日本人』一九七九年 未来社
- (4) 国立歴史民俗博物館研究報告第18集「共同研究『畑作農村の民俗誌的研究』一九八八年
- (5) 松崎憲三「大谷の民俗誌的素描」『中間報告』四八ページ
- (6) 『民俗の地域差と地域性―中間報告―』一九八九年三月 国立歴史民俗博物館 特別研究『日本歴史における地域性の総合的研究』「民俗の地域差と地域性」研究班

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)